

18	豊田	野見小学校	アラカワ アヤノ 氏名 荒川 彩乃
分科会番号	12	分科会名	自治的諸活動と生活指導（小学校）

研究題目 学級をよりよくするために仲間と関わり合い、主体的に行動する子の育成
 — 学級力アンケートによるレーダーチャートを用いた話し合いの実践を通して —

研究要項

1 はじめに

本学級は、男子14名、女子17名の計31名で構成されており、教師の指示を素直に受け止め、すぐに行動に移すことができる児童が多い。年度当初は、仲の良い友達同士で話したり遊んだりする姿が多く見られたが、学級全体をよくしていこうと周囲に目が向く様子は見られなかった。また、教師に言われてから行動する児童や、「誰かがやってくれるだろう」と率先して自ら動こうとしない児童が多かった。そこで、どんな学級にしていきたいか、もっと学校生活をよりよく過ごすにはどうしたらよいか、アンケートをとった。すると、「あまり話したことがない人がいるから、全員と仲良くなって話せるようになりたい」と記述した児童がいた。また、アンケートの結果から、理想の学級像はあるものの、どのようにして理想へ近付いていくか具体的な方法を考えたり、学級の課題に気付いて解決しようとしたりする児童があまりいないと分かった。

そのような実態から本実践では、仲間と協力して達成感が得られるように、児童が関わり合える場面を意図的に設定することにした。ペア・班活動を通して、互いを知り、認め合いながら力を合わせてやり遂げる経験をしてほしいと考える。一人では困難なことも「仲間と一緒にならぬ」「仲間がいるから頑張れる」「仲間のために頑張りたい」というように、学級について考えながら主体的に行動する力が育つことをめざす。

そして、学級力アンケートによるレーダーチャートを活用した学級会を通して、一人一人が学級の課題に気付き、考えて、思いや意見を伝え合い、皆で学級をよりよくしている実感をもてるようにしたいと願い、この主題を設定した。

2 研究内容

(1) めざす児童像

学級をよりよくするために仲間と関わり合い、主体的に行動する児童

(2) 研究の仮説と手立て

【仮説】

自分たちの実態を把握し、振り返りの場や関わり合う場を設定すれば、自ら課題を見つけたり、解決したりしようとするだろう。

手立て①：レーダーチャートを活用した学級の実態の見える化

理想の学級像である級訓に近付いているかどうかを確認するため、学級力アンケート（通称：しゃち力アンケート）（別紙1）を定期的にとり、その結果をレーダーチャートで見える化することにより、自分たちのよさや課題を捉えやすくする。

手立て②：児童が主体となって運営する学級会（通称：しゃち会議）の設定

学級の振り返りの場として、しゃち会議を定期的に行う。しゃち会議では、全員が運営する側（通称：計画委員会）の経験を通して、自分たちで会をつくっているという自覚をもち、主体的に話し合いに参加できるようにする。また、議題を自分たちで決め、話し合いを進めることで、自ら解決しようとする意欲を高める。計画委員会の中でも一人一役を与えることで、協力して話し合いを進行していくという責任感と自己有用感を養うことにより、進んで学級のために行動できるようにする。

手立て③：班会議（通称：しゃけタイム）や班活動の工夫

毎日、朝の会と帰りの会の中でしゃけタイムの時間を設けて、学級会で決めためあてを達成するため、各班でめあてを決めたり、確認や振り返りをしたりすることによって、積極的に友達と関わり合えるようにする。また、学級での当番活動（別紙2—①）を班単位で取り組む輪番制にしたり、それぞれの班活動では一人一役のレンジャー制度（別紙2—②）にしたりすることで、学級や班の一員として責任と自覚をもたせるとともに、学級をよりよくする活動につなげる。

(3) 年間計画

月	活動内容 ◎行事関連	アンケート	常時活動
4	・めざしたい学級像から級訓決め（※1） ・学級組織決め（前期）		輪番制の当番活動開始
5	・レーダーチャートでアンケート結果を提示 →めあて決め	第1回しゃち力アンケート （学級力アンケート） 級訓「しゃち」をめざすための12項目を挙げ、個人が学級の様子を見て1～4で評価	士気を高めるしゃちパワーあいさつ（※3）開始 レンジャー制度（一人一役）開始
6	・6月のめあて「思いやりのあるPEPな言葉（※2）をつかおう」 ・議題【班会議の名前を決めよう】	第2回しゃち力アンケート	朝・帰りの会でしゃけタイム（※4）開始
7	・7月のめあて「掃除を黙って時間いっぱい一所懸命にやろう」	第3回しゃち力アンケート （夏休み前）	
9	・計画委員会（※5）が輪番制で司会進行をするしゃち会議（学級会） ・議題【前期最後のめあてを決めよう】 →前期のめあて「毎日全員と1回以上あいさつをしたり、話したりしよう」	夏休み後にアンケートの結果を見せる	
10	・議題【後期の係を決めよう】 【ハロウィンパーティーの内容や役割を決めよう】 ・学級組織決め（後期） ・ハロウィンパーティー ◎運動会【どんな運動会にしていこうか考えよう】 ・議題【今年最後のめあてを決めよう】	第4回しゃち力アンケート （運動会后）	
11	・議題【『最後まで』の項目がアップする作戦をみんなでお話し合おう】 →11、12月のめあて「何事も最後まで取り組もう」 ◎10歳を祝う会の準備開始 →成長した姿を見せたいという思いをもつ10歳を祝う会に向けて、しゃち力アンケートで最も低い結果が出ている「清掃活動」をよりよくする方法の話し合い ・議題【清掃活動をレベルアップする方法をみんなでお考えよう】		
12	・議題【みんなで貯めたピー玉貯金の使い方を決めよう】 ・クリスマス会		
1	・新年会 ・議題【10歳を祝う会をよりよくするための作戦を考えよう】 ・1、2月のめあて「10歳を祝う会を成功させよう」	第5回しゃち力アンケート	
2	◎10歳を祝う会		
3	・しゃち力アンケートの振り返り ・議題【スーパーレク会の計画を立てよう】 ・このクラス最後のスーパーレク会	第6回しゃち力アンケート	

※1 級訓「㊦㊧㊨」…㊦あわせいっぱい笑顔いっぱい ㊧やるべきことは最後まで ㊨チームワークで助け合い

- ※ 2 PEP な言葉…自分も相手も勇気づける言葉
- ※ 3 シャチパワーあいさつ…級訓を大切にしたいという児童の提案から生まれた朝礼・終礼の名称。
級訓や元気になる言葉を入れて作成し、朝・帰りの会に皆で行った。
- ※ 4 シャケタイム…班会議の名称。児童たちで考えた親しみのある呼び名の方がその時間を皆で大切にしたり、より班会議のやる気が出たりすると考え、命名した。「シャケ」になった理由は、シャチよりも身近で小さい生き物だからこそ、毎日行う班会議に合っていて、シャチに響きも似ているという理由でこの名前に決まった。
- ※ 5 計画委員会…シャチ会議の司会、副司会（計時）、板書、記録の運営をするグループの名称。

(4) 抽出児童について

<抽出児童 A>

明るく、誰にでも話しかけることができる。「こうしたらもっと楽しくなる」「こうしたらもっとよくなる」という思いを強くもっており、学級の様子をよく見ているが、学級全体に呼び掛けることはあまりない。面倒なことに対して妥協したり、友達に対して自分本位で強い言い方をしたりすることがある。

本実践を通して、A 児の学級をよりよくするための考えを友達や学級全体に伝えられるようになってほしい。そして、皆で話し合っただけで決まったことに対して、妥協せずに進んで取り組み、「学級をもっとよくしたい」という思いを行動で示してほしい。

3 研究の実際（結果と考察）

(1) レーダーチャートを活用した学級の実態の見える化（手立て①）

まず、級訓に基づいたアンケートにするために、「㊟」「㊟」「㊟」をめざす学級は何かができるのか、「㊟あわせいっぱい」になるには何をすべきか、「㊟るべきこと」とは何か、「㊟ームワークがあって助け合いができる」とは具体的に何かができるのか、考える場を設けた。そして、出た意見を基に 12 項目を定め、学級独自のシャチカアンケート（別紙 1）を作成した。2、3 か月に一回、アンケートをとり、その結果を数値とレーダーチャートにして示し、学級の現状を捉えられるようにした。

アンケート 1 回目（資料 1）は、

ほとんどの項目が 8 割を超える結果となったが、満足する児童は少なかった。児童たちは低い結果になった項目に着目して「言い方が強い人がいるから思いやりが一番低いね」「もっと優しい言い方にしたり、ちょっとしたことでもお礼が言えたりしたらすぐに上がりそう」というように、自分たちから学級の課題を見つけたり、学級がよりよくなるアイデアを出したりしていた。そこで、児童のアイデアから思いやりを感じる元気になる言葉（PEP な言葉）（資料 2）を出し合う場を設定した。様々な PEP な言葉が挙げられ、その言葉を見て、児童は自然と笑顔になっていた。すると、「これらの言葉を掲示したい」という意見が出て、全員がそれに賛同し、自分たちで PEP な言葉を集めた掲示を作成し、常に確認できるようにした。休み時間や授業中にその掲示を見て、PEP な言葉で反応したり、勇気づけたりする姿が見られるようになった。A 児も、友達の間違いを「違うよ」とストレートに指摘していたが、PEP な言葉を出し合った後には、「おいしい」「ここまで合っているよ」というように相手を思いやった言葉掛けができるようになった。



資料 2 PEP な言葉

- | | | |
|-------|----------|-------|
| ・やったね | ・あと少し | ・すごい |
| ・お疲れ様 | ・応援しているよ | ・最高 |
| ・ドンマイ | ・大丈夫だよ | ・ナイス |
| ・その調子 | ・ありがとう | ・おいしい |
| ・なるほど | ・さすがだね | ・いいね |

2回目以降のレーダーチャート（資料3）は過去と今の学級を比較しやすくするために、それぞれの結果を重ねたり、棒グラフ（別紙3-①）にしたりして提示した。見える化することで、めあてに向かってどれだけ取り組めたかを実感することができ、「皆で頑張っている」という学級の一体感が次の活動への意欲につながった。また、11月のしゃち会議では、レーダーチャートからなかなか結果が出ていない「清掃活動」を児童が議題に設定した。A児も自分たちの学級の弱点や苦手に気付くことができたと言える。

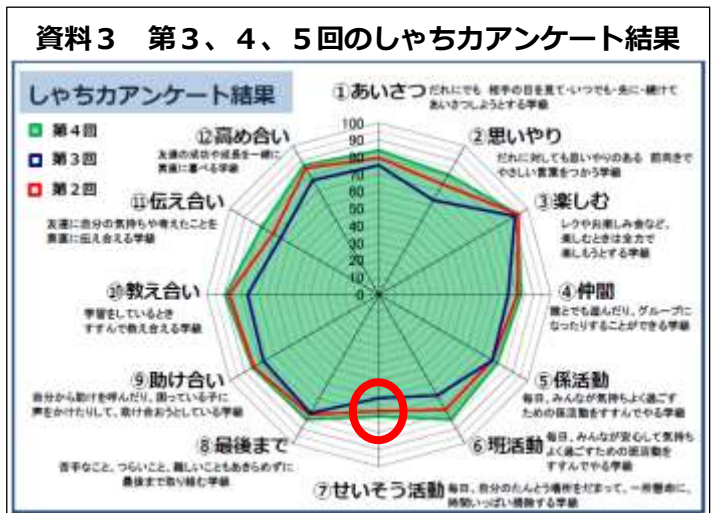
（2）児童が主体となって運営する学級会の設定（手立て②）

話し合いの流れや運営する役割について見通しをもち、児童が主体となってしゃち会議を進めることができるように、文部科学省の「学級会をしよう」[計画委員会の進め方]の動画を視聴した。5人1組で構成する計画委員会が、しゃち会議を司会進行することにした。主体的に会を進めることができるよう、その中での役割は児童たちで決めるようにした。（資料4）

計画委員会の役割は、司会・副司会・板書（2人）・記録とした。板書は意見を並び替えたり、内容ごとに色分けしたりできるように、短冊に書いてまとめた。また、隊形を円形にすることで、皆の顔や反応を見て安心して意見交流ができるようにした。（資料5）このようにすることで、一体感が生まれ、学級をよりよくしようと活発に意見を出し合うことができた。

また、夏休み前までは、意見がまとまらない際に、安易に多数決で意見を1つにしぼろうとする傾向があった。そこで意見のまとめ方（合意形成）について確認し、掲示した。（資料6）すると、それを参考に、出た意見のよいところをまとめたり、優先順位をつけたりするようになった。様々な意見が出て、どうしてもまとまらない時には「ここまでたくさん意見が出てみんなで話し合ってきたので、多数決をとってもいいですか」と司会が全員に聞いたうえで多数決を行い、意見をまとめることができた。

さらに、計画委員会が主体となって議題を決めることにより、しゃち会議へ臨む姿に大きな変化が表れた。計画委員会を立てる前は、めあてに向かって取り組むが、教師や班長の声掛けによって行動するという感じだった。しかし、計画委員会を立ててしゃち会議を開いた後の取組は「●●さん、今日めあてを意識して朝から皆にあいさつしていたね」「教室に入る時に元気よく言っている□□さんを真似していこう」と互いのよさを見つけて伝え合ったり、そのよさを真似したりして主体的にめあてに向かって行動する姿が見られた。特に、11月の議題「清掃活動をレベルアップするための方法を考えよう」では、しゃちカアンケートの結果がずっと低かったのを気にしていたようで、会議の前から意欲的な姿が見られた。「6年生の上手な掃除の様子を見たい」という声があがり、6年生の清掃の様子を動画で見せることにした。それを見た気付きを書かせたところ、「高学年に向けて、最高学年の姿を真似したい」と



資料4 計画委員会によるしゃち会議の様子



資料5 隊形を円形にしたしゃち会議の様子



資料6 意見のまとめ方



いう意見が多く出た。A 児も自分と比べて、6年生のよさをたくさん見つけていた。(資料7) その気付きからしゃち会議の議題を決めた。会議中も、皆、真剣な様子で途切れることなく意見を交わしていた。以前のA児はあまり積極的に話し合いに参加していなかったが、議題を自分たちで決めたり、会を進めたり、相談タイムを設けたりすることにより、自分のこととして捉え、よりよくするために真剣に考えていた。A児は「めあてすごろく」(別紙3—①)がよいという意見をもっていたが、すごろくは遊び感覚なので掃除に集中できないのではないかという理由で反対する児童が多かった。A児は今まで、反対意見が多い時には諦める様子があった。しかし、友達が自分の意見を信じて粘り強く伝える姿を見て、A児も自分の意見を貫く勇気をもつことができ、学級の皆に伝えることができた。(資料8) しゃち会議の結果「掃除のめあてすごろく」「掃除の始めと終わりにあいさつをする(切り替え)」という2つの取組を行うことになった。どの児童も今まで以上に意欲的に取り組み、その姿は学級の枠を超えて学年にも広がった。清掃の時も、A児は「あいさつしよう」と切り替えるよう声を掛けたり、「今日のめあては『掃除道具入れをきれいにする』だから最後に必ずやろうね」と呼び掛けたりするなど、皆で話し合っただけで決まったことに対して、進んで取り組む姿が見られた。

(3) 班単位での活動の工夫(手立て③)

今回、4人1組の班で取り組む活動を4つ取り入れた。

1つ目は、学級の当番活動(別紙2—①)を班単位で動かし、一週間ごとに活動内容を変えていくシステムである。最初は、自分たちの当番だけで精一杯だった。慣れてくると「●班、黒板だよ」「今週の配達のお△班、早いね」など、他の班に声を掛けるようになった。活動内容で分からないことがあった際、前の週に担当していた児童に「これはどうやってやったの?」と質問したり、週の終わりには、「次の当番は…」と事前に確認したりしていた。A児は、班員に「今週は□□当番だよ。その中でのお担当を決めよう」と自分から提案していた。また、当番活動を忘れてしまった時、班員から注意を受けると「そうだった、忘れていた。ごめん、やってくれてありがとう」と素直に謝り、次に生かそうとする姿が見られた。互いに関わり合い、よい関係を築いている様子であった。

2つ目は、班の中で一人ずつ役割をもつレンジャー制度(別紙2—②)である。この制度により、班のために責任をもって活動し、互いのよさを認め合えたことで、自己有用感が高められ、さらに次の活動への意欲を生み出した。一人の活動量が多い時には「ありがとう」と労う言葉が飛び交ったり、「手伝おうか?」「一緒にやろう」「今日は僕がやるよ」と助け合おうと声を掛け合ったりして、相手を思いやる姿が見られた。A児は、活動を忘れていた児童には「ドンマイ。僕も気付かなかつたし気付いた人が声を掛けていこう」と励まし、毎日しっかりと活動している児童には「いつもありがとう」などの感謝の言葉を伝えていた。また、班という枠を超えて同じレンジャーで協力し、進んで活動する姿も見られた。

3つ目は朝の会と帰りの会に行っている「しゃけタイム」である。しゃけタイムのために班ごとにファイルを作成し、めあてや当番活動、レンジャーの確認ができるようにした。朝の会では、めあてを確認した後に「楽しい気持ちでいいスタートを切ろう」という意識から、班で決めたミニレクをする班や、班独自の掛け声を考えて円陣を組む班もあった。帰りには、めあてに向かって行動して過ごせたかを「◎・○・△」で振り返ったり、友達のよいところを日記にして書いたりした。A児は「じゃんけんをしたら楽しそう」と班員に提案して、毎朝じゃんけんチャンピオンを開催した。帰りには「今日は僕たち、めあてに向かって頑張ったから、明日は今日と同じじゃなくて、こういうめあてにするのはどうかな?」とさらにレベルアップしようと提案していた。このようにA児を含めて自分たちで楽しめるよう工夫し、学級をよりよくしようとする主体的な活動が増えていった。

資料7 清掃の様子を見たA児の振り返り

自分たちはあいさつをしていなかったけれど、6年生はしっかりあいさつをして始めていた。ぞうきんでふくときにしっかり力を入れてふいていた。自分ができていなかったところがしっかりできていた。例えば、そうじ中だまって時間いっぱいできていて、そうじのプロみたいでまねしたいです。自分もあんなプロのような人になります。

(6年生が清掃する動画を見た後のA児の気付きより)

資料8 しゃち会議後の振り返り

ぼくは今日のしゃち会議で、Yさんのそうじにすごろくを取り入れるという意見がいいなと思った。反対意見が多くてぼくはやめようと思ったけど、Yさんは最後まで自分の意見を言っていてすごいと思った。ぼくも自分の意見を言う自信がもてました。

(しゃち会議のA児の振り返りより)

4つ目は授業やしち会議の中での「相談タイム」である。意見が出づらい時や自分の意見に自信がない時に班で確認する時間を設けた。(資料9) 班で取り組む活動を多く設定し、相談タイムを設けることと、意見は途中までもよいと安心感を与えることにより、どの児童も自分の考えを友達と伝え合うことができるようになった。さらに、全体の場でも進んで発言する児童が増えた。前期のA児は、相談タイムの時は消極的で反応があまりなく、自分から考えを伝える姿はほとんど見られなかった。そこで、班全員が反応しながら聞き合うことにより、自信をもって伝えられるようになることや、班で話し合うことで内容が深まり、さらによい考えになる、という相談タイムの意味を示した。相談タイムを重ねていくうちに、A児は他の授業でも「同じだ」「それもいいね」などの安心できる言葉で反応しながら友達と意見を伝え合っていた。以前の自分本位の口調から相手を思いやる話し方へと大きく変化したと言える。相談タイムだけではなく、全体の場でも前向きな反応が自然と出るようになった。

全体の場で、最後まで言う自信がない児童が意見を伝えられるように、班で協力して意見をつないでいく「リレー発表」という伝え方(資料10)を教え、途中まででも安心して自分の考えを伝えられるようにした。すると、全員が挙手して、班で話し合ったことをリレーで伝え合う姿が見られるようになった。

A児も「・・・ができると僕は嬉しくなるし、やる気も出るので◇◇さんの意見に賛成です」と友達の意見につなげて言うことができ、仲間と関わり合いながら、学級をよりよくしようとする姿勢が見られるようになった。

4 まとめと今後の課題

(1) 研究の成果

学級の実態をレーダーチャートによって見える化することで、児童自ら、結果が低い項目に着目して学級の課題に気付き、それをどうしたら解決できるかを考え、自分の意見をもつことができた。2回目以降のアンケート結果を重ねることで、より成果が分かりやすくなり、学級の皆で取り組んだことの充実感や達成感を感じ、次も頑張ろうとする意欲を高めることができた。また、その意見を伝え合えるしち会議を設定し、児童自らが運営することで、進んで話し合いに参加し、行動に移すことができた。しち会議だけでなく班活動での関わりを意図的に設定したことで、互いを知り、励まし合いながら主体的にめあてに向かってやり遂げるようになった。A児は、後期に初めて学級委員に立候補し「しち力アンケートのまだ低いところを皆で一緒に頑張ってレベルアップしていきたい。色々なことを皆で楽しめるように声を掛けていきたい」と発表し、学級委員に選ばれた。学級のことを考えながら進んで声を掛けたり、行動したりするなど、これまでの活動を通して大きく成長したと言える。また、異なる係や班でも協力し合う姿が多く見られるようになった。そのおかげで、個々のつながりがさらに深まり、話し合いだけでなく、日頃の授業でのペア・班活動でもコミュニケーションが活発になっていった。これらのことから仮説は有効であったと言える。

(2) 今後の課題

本実践を通して、アンケートを基にしたレーダーチャートと主体的な学級会を積み重ねていく中で、児童が進んで自分たちのために行動していく姿を見ることができた。今回は学級をよりよくする活動だったが、今後は、高学年として学校をよりよくするための更なる自発的、自治的な活動ができるよう、支援を模索していきたい。

資料9 相談タイムの様子



資料10 リレー発表の仕方

- C1: 私たちは〇〇の意見に賛成です。理由は●●さんが言います。
- C2: 賛成の理由は2つあります。1つ目は～からです。2つ目の理由は△△さんが言います。
- C3: 2つ目は～というのがこのクラスに合っていて、やる気が出ると思ったからです。